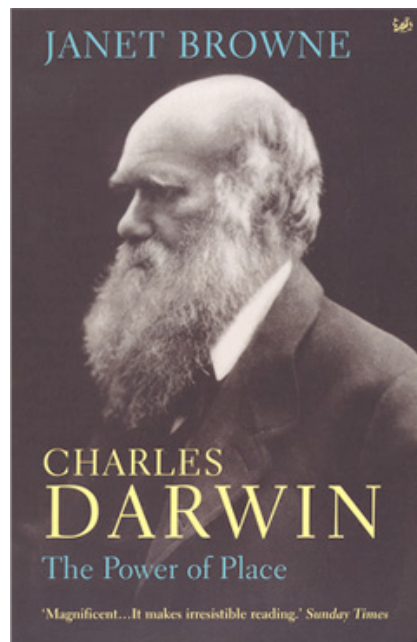


PhilSci Newsletters No. 3

Editor Ucci Uccini

ジャネット・ブラウンの第二巻、筆者による要約とコメント、つまり書評。ダーウィンの名声が高まり、『種の起源』という歴史に残る名著が出るまで、あるいは出た後は、周りの人々の様々な思惑や政治的活動が絡まり、第一巻の記述のような「正統的」な伝記のスタイルは少々路線変更を余儀なくされた観がある。そして、デズモンド&ムーアの伝記と読み比べてみればわかるのだが、ブラウンもこの先行研究を意識して、できるだけ話題が重ならないように努め、重なる場合には（それと断らずに）訂正を加える、という方針をとっているようである。もちろん、ブラウンが新たに発掘した材料も多いので読み応えがあるが、少々ウンザリする部分もある。

My review of Janet Browne's second volume of *Darwin*. This book is admired by many people, and was awarded a respectable prize. It is certainly worth reading and you can learn a great deal from it. However, I have to point out that there are several places where I have to complain. Presumably because my sense as a philosopher does not harmonize with her sense as a historian. For instance, I think her treatment of Charles Lyell is a bit unfair.



PART ONE: AUTHOR

1. Stormy Waters

第一巻から引き続き読む読者には、この章の冒頭、なにやら難しげな前置きは場違いな感じがする。デズモンド&ムーアの社会派的な伝記（1991年、http://www1.kcn.ne.jp/~h-uchii/philsci/Newsletters/newslet_30.html）の雰囲気は紛れ込んだ感じだ。ブラウンの伝記は、それとは一線を画した「正統派」の路線でこれまで通してきたのではなかったのか？それはともかく、ダーウィンの情報収集の核となった文通についての記述がそれに続く。文通に彼がどれだけお金を使っていたのか？彼の執事の一年分の給料に匹敵するほどの額なのだ。

1858年6月、東南アジアのテルナテからダウンに一通の封書が届いた。少し前から文通を始めていたウォレスからの便りだ。彼がテルナテで書き上げた手書きの「自然淘汰説」の原稿が同封されていた。彼の用件は、この原稿をライエルに渡して出版に値するかどうか見てもらってほしいということだった。ダーウィンは愕然とする。これが彼の言う「青天の霹靂」なのだ。ライエルの警告は現実のものになってしまった。この原稿の内容は、ダーウィンの44年のエッセイを、簡潔にしかも明晰にまとめたものだと言っていいほど、ダーウィンの自然淘汰説にそっくりのものだった。これが論文として出版されたら、ダーウィンの先取権はどうなる？しばらく呻吟したのち（どれほどの間かについては諸説があるが、ブラウンは「その日のうちに」と書いている）、ダーウィンはライエルに手紙を書き、この原稿を同封して発送する。「自分のオリジナリティはコナゴナだ」と嘆きを入れて。

ウォレス論文とダーウィン説の内容の「一致」は、ダーウィンが言い立てるほど「偶然」ではないと著者は言う。すでに『痕跡』が44年に出ていたではないか（ウォレスはこれに大きな刺激を受けた）。スペンサーは50年代からすでに

スケールの大きな進歩ないし進化思想を発表しつつあったではないか。ダーウィンがロンドンに住んでいたとしたなら、こういった社会的、知的潮流の変化にもっと敏感だったはずだろう。

つづいて、ウォレスについての短いが的確な記述が来る。彼は、ダーウィンとは対照的に、下層階級の出なのだ。高等教育も受けてない。働きながらの自学自習で、ロバート・オーエンの社会主義にもかぶれる。ヘンリー・ウォルター・ベイツと出会って博物学が目覚め、二人は「金になる」標本集めにアマゾンへと出かける(1848年)。しかし、ウォレスは、帰途、船火事と沈没で500ポンド相当の標本をすべて失って、無一文同然でイギリスに帰り着く(1852年)。アマゾン旅行記を出しても注目されず、お金にはならない。そこで、翌53年には、マレーシア、インドネシアへとまた標本採取の目的で渡航する。この頃には、人間はサルから由来したはずだと見当をつけていた。そして、ライエルが注目した論文(1855年)は、ボルネオのサラワクで書かれたものだ。また、マレーシアでは、人間の部族や動植物の分布が一定の線で区切られていることに気づく。地理的分布がどうやら進化に関わりがありそうなのだ。加えて、ライエルもマルサスもきちんと読んでいた。こういった背景があって、マラリアの熱にうなされていた間に浮かんできたのが彼の「自然淘汰説」だったのだ。

ウォレスの手紙につづいて、ダーウィンには別の不幸が襲いかかる。まず、三女のエティがジフテリアにかかる。次の日には、まだ赤ん坊の末っ子チャールズが猩紅熱の発症。寄宿学校に行っている次男のジョージは、はしかにかかったので家に帰そうかと学校から連絡が来る。こういう取り込みのさなかにウォレスの論文と自分のライフワークの調停をしなければならない。この苦境を救った黒幕は、ライエルとフッカーだった。「ことは急を要する。幸い、リンネ学会がすぐあるじゃないか。そこにウォレスの論文と、ダーウィンの何かの抜粋を滑り込ませて読み上げ、後で会報に出版すればいい。」この提案にダーウィンは気がとがめるが、赤ん坊のチャールズが亡くなった翌日には、44年のエッセイと、57年にアメリカのエーサ・グレイに送った手紙の写しをフッカー宛に送る。エッセイについては、フッカーに抜粋を適当に作ってくれ、ということだ。こうして、7月1日のリンネ学会では、まずダーウィンの抜粋と手紙、そしてウォレスの論文という順序で読み上げられた。二人の黒幕は、巧妙に友

人の先取権を守ったのだ。

エーサ・グレイへの手紙がなぜここで出てくるのか。それがこの「同時発表」についての判断をするときのカギとなる。ダーウィンが「分岐の原理」と名づけたアイデアが述べられているのは、この手紙しかなかった。そして、これが44年のエッセイやウォレス論文と異なるダーウィンのオリジナリティを示すからだ。この点は、わたし（内井）も自分で調べたことがあるので著者の見解に同意できる。ただし、この「分岐の原理」の内容や役割については、この章ではまだ十分な説明がない。

2. "My Abominable Volume"

残る難題は、ウォレスにこの顛末をどうやって伝えるかだ。ダーウィンはフッカーに話を持ちかける。フッカーは見事な釈明を書いてくれて、ダーウィンはそれを自分の手紙に同封してウォレスに送るが、彼から返事が来るまでの半年間は、心の中に爆弾を抱えたようなものだ。よく知られているように、この件でウォレスは実に紳士的な反応を示し、非難がましいことは一言も漏らさずに礼状をよこしたのだ。ダーウィンは、終生、このことを恩義と感じ続けたに違いない。

しかし賽は投げられた。ダーウィンの先取権が確定するかどうかは、この後のダーウィン説の全容を明らかにして出版することにかかっている。フッカーは、リンネ学会の会誌に載せる別の論文を急ぎ投稿せよとせき立てるが、ダーウィンの二十数年にわたる研究は、小さな論文に盛り込めるはずもない。材料は、すでに執筆中だった未完の大著の草稿を含め、山ほどあるのだ。書き始めると、言葉は堰を切ったようにあふれ出し、分量はどんどんふくらんでいく。これはもう大きな本にするほかないのだ。翌59年の1月にウォレスの返事を受け取って安堵したダーウィンは執筆に専念し、5月には草稿が完成する。著者ブラウンは、この本の構成や議論、ダーウィンの文体などについて解説してくれるが、『種の起源』そのものを読んだことがない人にはピンと来ないだろう。肝心の「分岐の原理」についてもまだ解説がない。(See my own paper, <http://homepage.mac.com/uchii/Papers/FileSharing78.html>)

この章の値打ちは、彼の執筆の骨休め、あるいは持病の治療に出かけた水療法でのエピソードにかこつけた、次章のための布石にある。アニーの死を思い起こさせるモールヴァンではなく、もっと近くのムア・パークの治療施設をダーウィンはひいきにしていた。その運営者の夫人の母親、レイディ・ドライズデールは、ダーウィンと同様、チャールズ・エドワード・マディの「貸本図書館」のファンだった。5ギニー（1ギニーは21シリング、1.05ポンド）の年会費で、毎月6冊までの新刊書が借りられる。ダーウィンは、この図書館で借りられる、三巻ものの小説のファンだった。後に『種の起源』の初版が出たとき、印刷された1250部のうち、実に500冊がマディに購入されたのだ（それは次章で明らかになる）。これらの本は何度も多くの人々に貸し出されたので、ダーウィンの読者層は大きく広がったのだ。こういった史実は、やはり本場の著者でなければなかなか調べ当てるのが難しい。

できあがった草稿の出版は、マレー社が引き受けてくれた。校正も大変だったらしい。一家の女性陣やフッカーなども動員されて種々のチェックが入った。学会での前宣伝は、ライエルが9月にアバディーンでやってくれた。

3. Publish and be Damned

1859年11月24日、『種の起源』が出版された。ダーウィンはムア・パークで水療法中で、献呈本につける手紙を二週間以上にわたって書き続けることになる。ダーウィンは、これまでも自分の研究のためにいろいろなネットワークを構築し、研究をサポートしてくれる人たちを集めてきた。しかし、著者ブラウンによれば、今回は自分の新しい本の重要性を意識し、私的なネットワーク作りではなく公にむけての説得工作に乗り出した。献本の送り先もそれを意識して選び、それぞれにへりくだった手紙をつけて良い反応を引き出そうというわけだ。もっとも、ブラウンのこの主張（解釈）、どういう根拠に基づいてそうなるのかは、テキストを読む限り、よくわからない。送り先の人々が、この本の書評を書いたり、大学やインテリ関係の人々に彼らの判断を伝えたりすることは当然予想される。しかし、ブラウンの主張は、そのようなありきたりの予想をはるかに超える強い主張に踏み込んでいる。このあたり、根拠となる「歴史的資料」をしっかりと示してもらいたいものだ（献本先のリストだけからの推論では弱すぎる）。でないと、「社会派」デズモンド&ムーアのいろいろな「オ

モロイ」大風呂敷と大差なくなってしまう。

本の売れ行きは、すでにふれたとおり、マディの大口注文が入って「即日完売」となってしまう。これからの半年間は、いろいろと出てくる書評や学会での反応に一喜一憂の日々が続く。しかし、親しかった人々の間では、いくつかの例外を除いて、反応は好ましいものだった。ダーウィンが心配したライエルの反応は良かった。彼は、ダーウィンをたくさんの質問攻めにし、この本から新たな知的インパクトを受けた。これまでの師弟関係は、この本の出版を機に逆転していく、とブラウンは言う。ハクスリーも、いくつかの保留はあるものの、この本を激賞し、以後、公の場ではダーウィンの代弁者の役割を果たしていく。

この出版を境に一変するのは、リチャード・オーエンとの関係である。ビーグル号の標本の鑑定では、オーエンは大いにダーウィンの助けになった。しかし、ハクスリーがオーエンを目の敵にしていたこともあるが、オーエンは、ダーウィンが自分を種の不変性を主張する時代遅れの解剖学者に分類したことに我慢がならなかったのだ。『種の起源』はやがて科学界を守旧派と革新派に二分していくことになるが、二人は不倶戴天の敵になっていくのだ。

以下、たくさんの書評からピックアップされた面白いサンプルの記述がつづくが、それはすべてとばして、伝説の「ウィルバーフォース対ハクスリー」の対決に移ろう。1860年6月、イギリス科学振興会の大会はオックスフォードで行われ、件の「事件」はドレイパーというアメリカに住んでいるイギリス人の長い退屈な講演の後で起きた。ウィルバーフォースが質問に立ち上がり、ダーウィンの新著をけなす演説を半時間にわたって繰り広げた。それを終える間際に、ハクスリーに振り向き、「あなたの類人猿の祖先がいらっしゃるのは、おじいさまの方ですか、おばあさまの方ですか」と尋ねたのだ。これに対して切り返したハクスリーの言葉はものの本に何度も引用されているのだが、真相は藪のなからしい。フッカーもヘンズローもラボックも立ち上がって意見を述べたが、どうやら皆自分が一番うまくやっていると満足しているらしいのだ。それどころか、ウィルバーフォースの方も「うまくやった」と思いながら帰ったらしい。

いずれにせよ、公の場で守旧派と革新派の論争があったという事実は、その後

いろいろ脚色されて、科学や学問の外の一般的な社会のなかでも話題になっていく。話は本題に戻るが、『種の起源』の出版は一つの社会現象を生み出した。

「ダーウィン革命」の真相は、自然淘汰の妥当性と同じくらい、出版物が大量に社会を、世界を駆けめぐったということにもあることを忘れるな、と著者は言いたいらしい (p. 102)。ダーウィンの側は、この流れにいち早く気づき、それをつかんだ。

4. Four Musketeers

この章は、「三銃士」の物語をもじった、ダーウィンの四銃士の活躍ぶりを描く。その四人とは、ライエル、フッカー、アメリカのエーサ・グレイ、そしてハクスリーである。巧まずして生まれた彼らの「共同作業」と「分業」は、ダーウィンの進化論を広めることに大いに貢献した。(ハクスリーがダルタニャン役を振り当てられている。)

まず、ライエルは、人類の起源の古さについて、彼の地質学の知識を活用して取り組み始めた。火打ち石などの石器を使っていた古い人類の化石は、マンモスなどの絶滅種と同じ時代の地層から出てくる。こういった事実を丹念に研究していくにしたがって、人類の歴史の古さは否定しがたくなり、ライエルの見解も進化論に接近してくるのだ。

フッカーは、ロンドンのキュー植物園の要職に就いていた。これはイギリス政府の機関であり、多くの植民地の植物園を統括し、イギリス帝国の経済的成長に陰で貢献してきた。この、制度的な要所から、フッカーはダーウィンの見解を広めて擁護し、多くの植物学者、議会政府の要人たちともコンタクトをとった。

ハーヴァードにいたエーサ・グレイは、ダーウィンの北米での「代理人」の役割を果たした。硬派の経験主義者だった彼には、すでにハーヴァードに移っていたアガンのような観念論的な形而上学に基づく生物学には、我慢がならなかったのだ。ダーウィン説は、これに代わる有望な枠組みを提供した。くわえて、すでにアメリカで海賊版が出回っていた『種の起源』について、彼は、ダーウィンのお墨付きをえた真正版で置き換える労をとった。また、『種の起源』を

擁護する書評をいくつか書いてアガシの勢力に対抗した。ダーウィンは、1861年になって、これらの書評をまとめてパンフレットにし、「自然淘汰は自然神学と矛盾しない」というタイトルで自腹を切って出版、配布した。第3章で著者ブラウンが公言した「ダーウィンの説得工作」は、こういった後の出来事まで考慮して初めて意味を持つてくる。

四人目のハクスリーは、ウィルバーフォースとの対決の後で「類人猿」に目標を定めた。ウィルバーフォースに解剖学の付け焼き刃を仕込んだのはオーエンだ。脳の小海馬が人類のみに特有で、それが人を類人猿から決定的に分かつ証だというオーエンの見解を、ハクスリーは徹底的に攻撃することにした。守旧派をたたき、職業的科学者の地位向上を図るためには、「解剖学」という一分科だけの知識では不十分で、それをはめ込んで意味を与えるもっと大きな科学の枠組みが必要だった。ダーウィンの進化論がそれを提供したのだ。その文脈でなら、人間と類人猿とが連続的か否かは大問題となる。ハクスリーは、また、労働者向けの講義でも同じような話題を取り上げ、進化論の普及に貢献した。

『種の起源』のドイツ語訳とフランス語訳の話も入るがそれは省略しよう。ダーウィンは、娘の保養をかねて訪れたサセックスで食虫植物を見つけ、その観察と研究に熱中してしまう。この研究は、1870年代半ばにまとめられることになる。61年5月には恩師のヘンズローが亡くなる。その死の間際、ダーウィンは自分の病気を口実にして、最後の見舞いに行くことを断る。

オーエンとハクスリーの類人猿論争がつづくなか、デュ・シャイユという探検家がゴリラの標本と、粉飾に満ちた話を携えてイギリスを訪れた。オーエンは、彼を自分の目的のために利用し、学会等で講演する機会をすすんで提供した。これは、大衆向けにも格好の話題を提供し、ダーウィンやオーエン、ハクスリーたちの論争点を、生き生きと目に見える形で示すことになった。しかし、デュ・シャイユの粉飾ぶりがやがて明らかになって、オーエンは評判を落とす。

In truth Darwin's proposals needed a well-publicised affray like this. Following hard in the footsteps of *Vestiges of the Natural History of Creations* and the Wilberforce-Huxley Oxford debate, the attention generated by apes and the arguments about apes propelled Darwin's ideas about evolution out of the

arcane realms of learned journals and books into the ordinary world of humour, newspapers, and demotic literature. Mr. Punch's monekeys and gorillas, Du Chaillu's tall stories, and Huxley and Owen's battle of wits forced the full implications of Darwin's densely packed theory to sink in much more quickly and thoroughly than he could ever have expected. (p. 161)

PART TWO: EXPERIMENTER

5. Eyes among the Leaves

1861年の頃から、ダーウィンはランの生殖メカニズムにとりつかれる。自家受粉よりも他の花からの受粉の方が強壮な子孫を残すという説に傾いていた彼にとって、ランの花の複雑な構造と、その生殖メカニズムとの関係は興味をそそるテーマとなったのだ。それに、ランの栽培やコレクションは、この時代の上流階級の間でもブームで、温室を作ったり、熱帯から珍しい種類を取り寄せたりする愛好家が多かった。何よりも、ダーウィンには、キュー植物園に勤めるフッカーという植物学の専門家を利用できるのだ。そして、自然淘汰による適応という理論的な道具立てを持っていた彼には、観察や実験で何をテストすべきなのか、力強い導きの糸があった。

ランには、ふつう雄の器官も雌の器官も備わっている。にもかかわらず、なぜ自家受粉が起こりにくいのか。ダーウィンの予想は、花の解剖学的構造に何か秘密があって、花粉が昆虫によって他の花から運ばれ、受粉するようになっているのではないかということだった。ところが、ランの種類によって、そういった構造は多様に異なっている。なぜだろうか。それは、それぞれの種類に応じて積み重ねられてきた、花と花粉を運ぶ昆虫との組み合わせによる数多くの適応が集積した結果ではなかろうか。こういった発想でランの研究ができる人は、この時代、ダーウィンしかいなかったのだ。そして、例の凝り性と几帳面さ、およびネットワーク作りの能力が合わされば、フジツボ研究の植物学版ともいべき仕事になっていく。

ランのいろいろな種類は、設計されたプランにしたがってできているように見える。しかし、この「設計」は、設計者を必要としないし、予見も必要としな

い。「設計」のように見えたものは、自然淘汰が盲目的に積み重ねた適応の集積にほかならない。ダーウィンは、この一般的なシナリオを、ランの個別的な事例で示そうとしたのだ。このモノグラフは1862年に出版された。

ほかに、ダーウィンの文芸や思想に対する影響も論じられている。

6. Battle of the Books

ランの仕事を終えたダーウィンは、自然淘汰説の「証拠編」ともいうべき、動植物の変異をまとめる仕事に戻る。そして、この頃、マレー群島からイギリスに帰国したウォレス、あるいはアマゾンから帰国したウォレスのパートナー、ヘンリー・ウォルター・ベイツとの交流も始まる。自分自身は、動植物の変異研究や自宅での実験や標本作りの手を広げ、新たに温室まで作って、フッカーにねだってキュー植物園から160種もの植物をせしめる始末。しかし、この章のテーマは、こういった細々した出来事ではなく、ダーウィンの取り巻きの人々が出版していく、進化論がらみの本の話だ。

1863年に入りライエル、ハクスリー、およびベイツの本が次々と出版される。ライエルは、人類の古さについて進めていた研究を、『人類の古さについての地質学的証拠』という本にまとめる。要するに、人類の歴史は、氷河期よりもっと古くまで遡るという主張で、反対の見解を持つオーエンらを慌てさせる。しかし、このライエルの本に『種の起源』に対する言及はあるものの、人間と動物との間にはまだきわめて大きな溝があるという主張も堅持されており、ダーウィンはこれを読んでいたく失望する。

ライエルの本に少し遅れて、ハクスリーの『自然における人間の位置』が出る。こちらは、サル、脳、そして人間に関するオーエンの見解に対する容赦のない攻撃を展開し、人間を類人猿の仲間に位置づけたもの。この本は、『種の起源』と同じくらい急速に世界に広まった。

1859年にアマゾンから帰国したベイツは、61年にダーウィンと知り合いになった。以後ダーウィンはベイツの支援者となる。ベイツは、昆虫の擬態と、進化の分岐を指し示すチョウの標本群をダーウィンにもたらした。ダーウィンは、

アマゾン流域の自然誌を本にするようベイツを後押しし、図版の費用まで肩代わりしたのだ。こうして『アマゾン河の博物学者』が63年に出版された。ベイツは、二つの異なる種類のチョウとふつう見なされるものが生息する地域の間、四つないし五つの移行的な形態が存在することを明らかにしたのだ。

7. Invalid

1863年の夏以後、ダーウィンの健康悪化は新局面を迎える。嘔吐、吐き気、湿疹が繰り返すようになり、何人かの医者に相談するがよくなり、結局、しばらく避けていたモールヴァンでの水療法に出かけることになる。ところが、当てにしていたドクター・ガリーも健康を損ねていて、この旅は完全な失敗に終わる。それどころか、ダーウィンは完全な病人、廃人同様になってダウンに戻ってくる。そして、この最悪の健康状態は三年あまり続くことになる。まだ五十半ばなのに、大変に老け込み、命の次に大切なくらいの文通まで、妻や娘の代筆を頼まなければできなくなるのだ。しかし、彼はすでに大きな名声と重要な社会的地位を確立していた。病を理由に完全に隠遁生活に入り、医者も同僚の科学者たちも、必要とあればすべて自宅に呼びつけて事を運ぶように付き合い方を変えていく。

そうしたなか、1864年11月にはロイヤルソサエティの最高の栄誉、コプリーメダルがダーウィンに授与されることになる。洋の東西を問わず、こういった「公の」栄誉には裏での「政治工作」が付きものだ。その工作は62年に始まっていたのだが、ハクスリーなど、ダーウィンの取り巻きが審議会に入っていた63年には、対抗馬にセジウィックを持ち出されて不成功、翌64年には審議会の委員が入れ替えになって、フッカー以外、取り巻き連は委員に入らなかった。しかし、ほかの委員たちがフェアだったと見えて、指名に成功するのである。しかし、受賞理由から『種の起源』は意図的に外されていた（アインシュタインのノーベル賞も、受賞理由は相対性理論ではないのだ！）。科学における「自然主義的アプローチ」（神学や宗教色を排除する）を推進しようとし、そのためにダーウィンを推してきたハクスリーには、これが我慢ならず、彼の活躍の場がまた提供される。授賞式で「議事録を読め」と要求し、受賞説明の文言を変えろとセクレタリにかみつきの、不十分と見るや、自分の息のかかった雑誌に、気に入らない文言を削除して再録した。

ブラウンの本では、この出来事があってハクスリーは「Xクラブ」を結成した、とつづく。デズモンド&ムーアの伝記とは時系列が逆だ。このクラブは、私的な食事会だが、ハクスリーと志を同じくする同志を集めたもの。フッカー、スペンサー、ラボック、ティンダル、バスク、ハースト、フラン克蘭ド、スポットティスウッドと、科学の諸分野を曲がりなりにもカバーできるメンバーを集めた。要するに、科学行政に裏から影響力を行使し、科学をあるべき姿にしていこうという結社である。

人類学の新しい動きもこの頃始まり、人類の単一起源説、複数起源説、黒人蔑視、奴隷制に対する賛否などの政治的立場なども入り交じる。古くからの民族学会は奴隷制反対で、大勢として単一起源説を支持、新しい人類学会が奴隷制支持、黒人蔑視で複数起源説をとろうとする。こちらの学会誌に、ウォレスは論文を寄稿し、人種の違いを説明するのに初めて自然淘汰説を適用しようとした(1864年)。人類は単一起源だが、その後自然淘汰によって人種が分かれたというのだ。これはダーウィンを喜ばせるが、人間の進化についてその後両者の見解を分かつタネも含まれていた。1865年には、フィッツロイが喉をかき切って自殺を遂げる。

翌66年の春になって、ダーウィンの健康はわずかに好転する。そこで変異の仕事を再開し、『種の起源』第4版の仕事にもかかる。久方ぶりに彼はロンドンのロイヤルソサエティの夜会に出かけるが、あまりの変わりようで、友人たちは誰かわからず、自己紹介をしなければならない始末。

ダーウィンが隠遁を続ける間も、彼の本はいろいろな国の言語に翻訳され、国際的な名声も高まっていく。彼の幾人かの追従者は、巡礼のようにダウンの館を訪れるようになるが、もっともダーウィンをあがめ奉ったのはドイツのヘッケルである。

8. The Burden of Heredity

ブラウンの二巻本、第一巻と第二巻の違いがだんだん明らかになってきた。パート2に入ってそれが少々気になっていたのだが、とくにこの8章はその感が

強い。第一巻第二巻とも三部立てなのだが、第一巻では一部に6 – 8章が収められていたのに対し、第二巻では4章ずつである。つまり、第二巻では一章に費やされる分量が二倍近くにふくれあがっているのだ。もちろん、ダーウィン熟年期に入って、論じるべき事柄が多様になっていくのはわかるのだが、わたしは第一巻のリズムの方がよかったと思う。とくに、この8章は、タイトルとは直接関係のない話が多く入って、字数もだらだらと多く、少々ウンザリする (the burden of constitution!)。わたしが著者なら、もっと章の数を増やして話題を分け、リズムよく話を進めたいところだ。

それはともかく、この章には、熟年期ダーウィンの二大トピックス、遺伝と人間の進化が関わってくるので重要なところなのだ。病に呻吟していてもダーウィンはただ者ではない。遺伝のメカニズムに関する自説を考えていたのだ。自然淘汰の材料となる変異はどのようにして生まれ、どのようにして次世代に伝えられるのか。後知恵からすれば、この問題はメンデルがすでに部分的に解きつつあったのだが、実験するのもままならなかったダーウィンは純粹に頭の中で「パンジェネシス」という仮説をひねり出した。著者はふれないが、ダーウィンは、ある意味で、「グレンロイの平行道」と同じような、実験的裏づけを欠いた仮説形成に走ったのである。それによれば、生物の体内のどの組織でもジェミュールと呼ばれる小粒子が作り出され、それが遺伝情報を担って、生殖の際に子孫に伝えられる。この粒子はすべての遺伝情報を担うのではなく、それが生み出された部位だけの情報を担う。そして、胚の中ですべての粒子が混ぜ合わされたときに、新しい組み合わせの情報をもった個体ができる。有性生殖の場合、部分的情報を担う粒子は父方、母方の両方から来る。こうして、獲得形質の遺伝も許容しうる理論的モデルができたわけだ。著者ブラウンは、ダーウィンの時代の「遺産相続」のイメージも重要なファクターを提供したと言いたげだが、それは「話半分」で読み流しておけばよい。ダーウィンが、自分の病や子供の病と、従姉との結婚という要因 (インブリーディング) との関係を気にかけていたこと、そしてそれゆえ遺伝の問題には並みなみならぬ関心を持っていたことは、伝記作者が例外なく認める事実だ。

このパンジェネシスの仮説は、ダーウィンが気にかけていた、F・ジェンキンによる批判もかわせる可能性を持っていた。ジェンキンの批判とは、有利な変

異が生まれても、グループの大多数の個体がその変異を共有していない場合には、交雑によってその変異の利点は急速に薄まって定着するはずがない、というもの。パンジェネシスを認めれば、小粒子は遺伝で消えないし、用不用で獲得された形質も次世代に伝わる。したがって、有利な変異はジェンキンが言い立てるほど簡単には消失しない、というわけだ。この仮説を盛り込んだ『飼育栽培下での動植物の変異』は、1868年1月に二巻本で出版された。

この仮説は友人たちの間でも不評だったが、強い関心を示したのが従弟のフランシス・ゴルトンである。彼は1865年にマクミランズ・マガジンに、優生学の嚆矢となる論文をすでに発表していた。パンジェネシスを読んだゴルトンは、ウサギを使ってジェンミュールの伝達を実証できないものかと実験を始めたのである。この粒子は血液にのって運ばれるはずだ。なら、ある形質を持つウサギの血液をほかのウサギに輸血して、その子孫に同じ形質が現れるかどうか観察すればよい。この予測を支持するかに見えた結果も得られたが、最終的には、それは形質の統計的なバラツキの範囲に収まるとゴルトンは結論せざるを得なかった。自説に未練があるダーウィンは、ウサギをダウンの館に取り寄せるまででした。

この話の直後に、「自然淘汰にかかる変異のうち神の配慮が働いている」というエーサ・グレイの見解に対するダーウィンの反論が来る。しかし、これは遺伝とは無関係の話だけれども、ダーウィニズムにとってはきわめて重要な論点だから、おそらく章を一つ設けて、もっと体系的に論じるべき話題だろう。

この章の後半は、遺伝とは関係のない、家族の出来事の細々した話がつづき、6－9節では、関心を人間に向けたダーウィンとウォレスの見解の対立が扱われる（後半面白くないゾ、と思った読者は危うく読み損ねるところだ！）。この話題も章のタイトルに似つかわしくないどころか、次章で取り上げられる大テーマなのだ。したがって、ここでも章を増やして、『人間の由来』を二つの章にわたって前編、後編として論じた方が良かった、とわたしは思う。それに値する十分に大きなテーマだ。テーマではなく、時系列にこだわる歴史家のセンスがそれを妨げたのだろう。

PART THREE: CELEBRITY

9. Son of a Monkey

この章のテーマは、『人間の由来』（1871）と『人間と動物における感情の表現』（1872）の出版、そしてその間における諸種の出来事。『人間の由来』で扱われるテーマについては、すでに前章の終わりの方でもふれられたので、話が分散して少し密度が薄くなった観がある。ウォレスが人種の違いを自然淘汰で説明しようとして、ダーウィンを喜ばせたのだが、スピリチュアリズムにはまったウォレスは、人間のいくつかの能力は自然淘汰では説明できないという見解に行き着く。これに対し、ダーウィンは徹底した自然主義で人間の進化も考えようとする。動物と人間の連続性のテーゼは、議論や証拠立てに大きなギャップがあるにもかかわらず印象的だが、それに加えて性淘汰のメカニズムが導入され、人種の違いなどはこちらで説明しようとするのだ。しかし、歴史家ブラウンは、こういった（哲学者の目から見るとワクワクする）話題は比較的サラリと記述して、ダーウィンと争った人たち、カトリックの解剖学者マイヴァート（一時、ハクスリーとダーウィンに近づき友人となった）、社会改革家フランセス・パワー・コッピなどとの確執の記述に腕をふるう。それはそれでいいのだが、『人間の由来』の真骨頂はどこにあるんや？それを明確に際立たせてくれない「歴史的記述」にはたいした意義はない（ワシに言わせてもらえば、人間についての画期的なヴィジョンを示した、一貫した「予言者」としての役割、そして現代までつながる徹底ぶりがスゴイのとちゃうんか？）。『種の起源』から時間が経ち、進化思想が一般に行き渡って、反対者の勢いも穏やかになってきたとかどうか、ダーウィンが信仰は捨てたが、ジェントルマン階級の価値観や偏見はしっかり保持していたとかどうか、そんなことは、いちいちペダンチックに歴史的証拠を開示してくれんでもわかっると、ちゅうねん。（わたしが京大人文研の下っ端所員だった頃、今西錦司や桑原武夫の悪口を公に言おうものなら、それこそ袋だたきに遭ったはずだ。そんなことは常識として明らかだろう。）

この本の編集、校正には娘のヘンリエッタ（エティ）が腕をふるった。タイトルや一部の文章には出版社マレーのクレームがついたにもかかわらず、この本の売れ行きは上々で、ダーウィンは少なからぬ利益を計上する。この本に対し

ては、「ダーウィンの仮説が本当なら人間の社会や道徳性は崩壊する」という類の反論が多数出る。しかし、ダーウィンにとってもっとも手厳しい書評を書いたのはマイヴァートであり、これに裏で対抗するため、ダーウィンは、マイヴァートの本を批判したジョンシー・ライトの論文をパンフレットにして配布する。また、『種の起源』第6版に新しい章を追加して自説の手直しを図る。マイヴァートは、これでやめておけばよいものを、ダーウィンの息子ジョージの論文を中傷してダーウィンをカンカンにさせ、遂にダーウィン一派から破門宣告を受ける。後に、彼はカトリックからも「進化を信じた罪」で破門される。

『人間の由来』に入らなかった題材は、『人間と動物における感情の表現』にまとめられて翌年に出版される。この本では、新しい技術、写真によって人間の表情を分析する手法が導入された。写真家や医者 of 助力を得たのである。また、ダーウィン自身の風貌も、写真によって一般の人々によく知られるようになってくる。ダーウィンをサルに見立てた風刺画が、この後定番になってくる。

この後、わたしのような哲学者向けにオモロイ話はあまり期待できそうにない（やっぱり、歴史家とはソリが合わん！）ので、レビューはひとまずここで終わりとしよう。残りの三章、タイトルは次の通り。

10. Darwin in the Drawing Room

11. England's Green and Pleasant Land

4節、生体解剖（実験動物の）についてのダーウィンのスタンスが興味深い。動物虐待に対しては、ダーウィンも彼の家族も同様に反対だが、彼は生理学の研究も重要視していた。生体解剖反対の法律を提案した陣営には、（すでにダーウィンと仲違いしていた）社会改革家のフランセス・コッピも深く関わっており、ダーウィンはこの法案では生理学研究が著しく阻害されると考えたようだ。彼は動物も大切だが生理学研究も大切だと主張する逆の請願の立場に身を投じた。そして、死に至るまで、この問題に関わっていた。[ちなみに、シジウィックの『倫理学の方法』でもこの生体解剖論争が短くではあるがふれられており、「賛成、反対どちらの論拠も功利主義的だが、知識と究極的善との関係が掘り下げられていない」という趣旨のコメントが加えられている。]

この章でもう一つ面白いのは、ダーウィン『自伝』執筆の経緯と、その内容のクリティークだ（6節）。この自伝、家族によってかなりの削除、編集が行われて死後に出版されたことは周知の事実。1958年になって、孫娘が無削除版を出版した。

12. Home is the Sailor

ダーウィンの最晩年と彼の死、そして亡骸がウェストミンスターにまつられる経緯。

.....
上の記事は、今年八月に、わたしのブログに掲載した読書録を編集したもの。最後の方は、少々カンシャクを起こしたので、はしょった記述になっている。

December 4, 2008. © Soshichi Uchii